

## マルコによる福音書1章29－45節

### 「その手で触れる」

マルコの福音書に記されている初めての病気の癒しは、29 節以降のペテロのしゅうとの熱病の癒しでした。また、40 節以降では、重い皮膚病を患っている人への癒しが書かれています。二つの癒しの物語で共通したものの、それが「その手で触れる」ということです。

40節の「重い皮膚病」は、口語訳聖書では「らい病」と訳されていました。日本では、つい最近まで「らい病」という呼び名が、ごく普通に使われていたからです。この病気は目に見えるところに症状が現われてくことや、原因が分からないために恐ろしい病気と見なされていました。ですから差別や偏見の目で見られていました。この病気に罹ると、強制的に隔離させられ、そこで一生死ぬまで過ごさなければなりません。家族からも社会からも一切の関わりが断ち切られるのです。肉体が痛み苦しむだけでなく、その病の為に人々から見捨てられる、そういう差別や偏見を受けなければならなかったのです。「重い皮膚病」と言葉で説明しても、知ることのできない重い現実があります。その人の置かれたところに立ってみなければ分からない苦しみがあるのです。

重い皮膚病の人は、どれほどひどく苦しめられていたのでしょうか。その苦しみを抱えてイエスさまに近づきました。「御心ならば、わたしを清くすることがおできになります。」この「御心ならば」とは、「あなたが意志されるならば」と直訳できます。自分の願いよりも主の御心ならばと、この人の主に対する信仰を見ることが出来ます。この言葉に対してイエスさまの答えは、「よろしい」でした。これも元の言葉で言えば「わたしはそのように意志する」という強い言い方になっています。そして「イエスが深く憐れんで」とあります。聖書の「憐れむ」とは、上から目線で心配するという意味ではありません。人間のお腹、体の真ん中の最も大切なところ(はらわた)がちぎれる想い、という意味です。自分の体が一緒に痛み、苦しみ、悩むのです。その人と同じ所に立っているのです。

同じ立場になるというイエスさまの思いは、言葉だけでなくさらに行動によっても現れています。「手を差し伸べてその人に触れ」です。いわゆる「らい病」の人に触れるということは、触った人自身も「汚れたもの」とされてしまいました。それでもイエスさまは、その病人に対して自らの手で触れられたのです。これは、憐れみをもっていただけでなく、イエスさまの目には重い皮膚病の病人は、汚れた人として映っていなかったのでしょうか。ただ絶望的な中に打ちひしがれている、一人の私たちと何も変わらないただの人だったのです。誰も気にしてくれない、触れてくれない。そのような扱いを受けていた重い皮膚病の人。イエスさまはただ彼の体を触れてくださっただけでなく、彼の心にも触れてくださったのではないのでしょうか。乾ききっていた彼の心に、イエスさまの優しい潤い水が、なみなみと注がれていったのです。言葉だけでなく、その行為でもイエスさまの深い憐れみが、この箇所から私たちに示されているのです。

しかし今日の癒しの話は、この人の病気が治ってよかったというのではありません。43 節で「だれにも、何も話さないように気をつけなさい」と伝えました。しかしこの人は約束を守らず、人々が大勢押し寄せ、イエスさまは町の外に追い出されるように立たされました。この重い皮膚病を患っていた人が、町の外にはじき出されていたように、イエスさまは人々からはじき出されるのです。それでも最後まで私たちに憐れんでくださる主の御心を、私たちは深く心に留め、御心に生きたいと願います。